

<フォーカス>

「日中友好」を担う人びと

時々「なぜ中国に対しては友好協会があり、友好運動があるのか」と聞かれることがある。韓国、ロシア、米国などに対しても友好組織があり、活動も行われているが、全国と地方に組織があり、都道府県や数百の都市が中国の省・市と友好提携しているような国は、他にはない。

日本の国際交流活動の中で、日中友好はひととき大きな存在だ。それはなぜなのか。まず、日中は隣国で、特別の関係がある。2000年の交流の歴史があり、中身も深い。日本文化の基礎を作った稲作、漢字、仏教、儒教、律令制度、貨幣制度などはすべて中国から伝来した。

また、吉野ヶ里でわかったように、弥生人には大陸系の遺伝子が入っていた。中国大陸からの渡来人が日本人のルーツの一部であり、日本民族とは兄弟の関係にある。

このように、長い交流で大きな文化的恩恵を受けてきたのに、明治以来の近代日本は中国を蔑視し、敵視し、侵略行為を繰り返し、2000万人を超える中国人を殺傷し、国土を荒廃させてきた。これに対する深い贖罪の意識が戦争を体験した多くの日本人の中にある。国交回復運動や友好運動の基礎を築いたのは、こうした人たちだった。

友好運動の中核を担うのは、こうした歴史認識をふまえ、使命感を持って活動している人たちだ。しかし、今日の友好活動はもっと幅広い人たちに担われている。理屈抜きで「中国大好き」な人たちがいる。中国の歴史、文化が大好きで、機会あるごとに中国と交流する。

中国が好きではないが、最も重要な隣国で、友好関係が大切だと考える人も多い。さらに、少子高齢化が進む日本は、これ以上の経済発展は望めないから、中国とのビジネスで活路を聞きたいと考える人も増えている。

私は、歴史認識を踏まえ、使命感を持って運動に参加している人間の一人だ。しかし、この層はしだいに高齢化し、引退していく。勿論、同じ意識を持つ人たちが育ってきているが、まだ多くはない。全体として高齢化が進み、活力が落ちている。そこで、神奈川県日中友好協会では、数年前から高校生を重点に新しい交流活動を始める一方、若者を対象に「チャイ華」というボランティア組織を作った。ネットで参加を求めたところ、現在、80人を超す若者が参加している。現役時代中国ビジネスに従事していた企業OBたちが「中国ビジネス相談室」を立ち上げ、活動を始めている。今後は、こうした若者、女性、企業家、企業OBなど、幅広い層に参加を求め、ぜひ裾野を広げていきたい。